

直ちに家を去り、残る形見の君を抱いて兎も角もなれ、甲駿遠の三ヶ國あれほどの武士は皆これ江戸衆のうち、我のみ草葉の蔭の浪人より拾はれて、しかも格外の寵遇うけし御恩の程を思はば、父子三人たとひ人しれぬ野末の露に屍を晒すとも怨恨なし、士は己れを知るものゝために死する本々こゝなるぞと、涙の教訓を遺して立出でし父の姿も、悲しや今は雪もろとも解けて痕なき二月の空となりぬ、

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

いさゝか仔細ありて二月までは得歸らじ、その間の音信不通に心いためず、幸作ともぐしづかに留守せよと、言葉を残して立出でし老たる主の後は、

猶更ら四年の旅に勞れし若き主を守りて、下郎ながら年來馴れし厨の働きも、女手に立勝る今日このごろは一入あはれなりけり、世に盛る富貴の門前にも、世を忍ぶ涙の宿の籬根にも、けに變らぬものは花の色、變るは人の身の上と、時に取つての懷舊を今日眼前の風流に供へむとや、庭の朝露辟分けて花の梢の一枝手折りつゝ、用意の膳部に差添て、今やくと待つうちに旭は高く昇れども、たえて主の目覺むる氣配なし、まことに憂患を掃ふ玉帚と、何事ぞや前夜にかぎりて元來好まぬ酒を過されしが故か、もし心地や悪くて御身に障る事ありてか、若年けれど父御に似ませぬ早起の御性分、さても訝かすと家も身も隔離なけれど流石に隔つ主従の禮儀、おそろしく臥房の障子を叩いて昔ながらの呼聲に

「和子様、和子様」呼べども更に返答なきのみか、隙間より差覗けば残燈かすかに微動いて、厚かる夜具の薄きも道理かや主は藻脱の殻、廁かと思れども音なく影なきに、走入つて枕邊を探れば南無三、我に宛たる一通の遺書、筆の跡さへ涙に濕りて哀氣なり、

取急ぎ候故委細に及ばず、こゝに一筆あらく、書残し候、さて父こと大納言様へ御奉公の砌は勿論、其後浪々の身と罷成り、わけて我等旅立ちしあとは、世間せばき一人の老父を様々の介抱のみか、男手に成るまじき年來の水仕事まで如才なく、其身の出世を無物としての芳志、まことに亡兄が世に在るにも勝りて心丈夫に嬉しく思ひ

なほ行未ながく父子ともく世話に相成度候へども、此たび是非なき事差起りて、二月になるも猶ほ歸宅なき父は残念ながら生害のこと、ついては我等また當所に止まり難きため此まゝ出立いたす事の仔細、かねてより打明け申すべき筈ながら、さては却て其身を害ふほどの成行に候へば、ゆめく我等父子の薄情と怨むまじく、せめては後々の思ひいづる日に一遍の回向のみ入候、聊かなれど金子三十兩、これは父よりの申付にて差残し候間、五兩を父兄が佛事石碑の料にいたし、五兩を總泉寺永代の續經に供へ、あとの二十兩は何なりとも其身を立つべき便宜に致さるべく候、また家具調度一切は賣拂ふて、惜からぬ一命なれど今しばし入用の我

* 後の海賊 *

等が武運いのりのため、乞食非人になりとも廣き布施の程たのみ入候、

衣服のうち定紋ある分は父の形見として其身めさるべく、また我等が心はかりに残しおくものは此印籠龜末ながら名物として一家の傳來に候、

幾度くりかへすも同じ事ながら、その身ほどの忠節者が、我等父子の如き果報つたなき武士を主取いたせし事、かへすくも氣の毒に存じ候、たゞ前世よりの宿縁と諦らめなさるべく候、

あゝ善惡ともに口惜しきものは下郎の身なり、我は固より佛神かけて怯れじと思へども、年來かくまで仕えし主にさへ大事の用には立つまじと見られ、

* 後の海賊 *

あたら九尺の一身こゝに取残されて、他人めいたる二十三十の小判が何とたるべきみすぎ世過の業を願はゞ蕘の浪うつ江戸三界に、片輪ならぬ無事息災の身を今日まで草に埋めつゝ、下婢に等しき厨働きは末遂けぬ忠義に泣かむとてか、さるにても恨めしの主や淺まし我や、たとひ如何なる仔細ありとも、せめて一言かくと告げ玉はゞ十年の奉公に代ての嬉び、よしや甲斐なき下郎は結句事の妨障といはれても、お去らば去らばと手を取つて別るゝならば儲やみなむものを、これまでさんく欺き玉ふて今更ら一通の遺書に、三世と契る主従の縁を思ひきれとは、いづこの里にて習ひ玉ひし鬼真似ぞ、なさけなや腹立しや、韋駄天ならぬ前夜の今朝なほ遠くは行かれぬ後を、おツかけて怨恨のかすく言ふも易けれと、これほどまでに見下けられたる主は

我より慕はしからずと、年來の忠實とどかね悲歎すぎて怒りの餘り、頭髮剃落して門外の總泉寺に驅込み、あはれ一部の讀經さへも叶ばぬ無學の俄法師となりぬ、

其五

櫻さく春の景色を見残して、海には浪の花さく彌生の末つがた、伊豆と駿河の境なる江浦の湊口より、四百俵の米と六十餘櫃の茶を積込で、志州の鳥羽へ廻船の八百石、十七端の帆風を切つて出船の聲々いさましく沖へ向ひぬ、豆州の江梨崎を横ぎつて遠州の既崎へは十八里の海上、三分の汐を乗出して三保と久能の沖にかゝりしころ、船玉の清掃も濟で櫓に理はれし船頭の聲、

「やア水主も炊飯も皆來い、船乗渡世すりやこそ、あつたら快夢の春を女房もろとも捨置いて浪の上の境涯、酒でなうては腹が癒ぬ、船持の目を盗んだ天の美祿こゝへ、ついでに表の間を貸切つた便船の衆よんで來い、これも積荷の外の我等が役徳、江戸の商人さうなが猶しみぐと逢はぬ、船頭お馴染甲斐に一献さし上げうと挨拶せい」

汐鏑聲に喚かずとも、酒と聞いては後れぬ徒輩、どやくと集まつて菰を敷寐の大酒盛、八重の汐路の霞まで吸ふて呑込む真最中へ、呼ばれて櫓に出來りし五人の男、いづれも旅商人の中に一人色白の年若は、主の體にて残る四人は附添ふ手代の風情、割膝ならべて慇懃に頭を下け、

「これは、船頭どの、ゆうべ夜深に頼み込で今曉薄層に乗込だ急がしさに、

ついで機会を見外して今までの無挨拶ひらに、我等は元來中國者なれど長崎の唐商賣、近年遺損ねて家を潰し、これに居らるゝ主もろとも俄かの旅商人、東國はまた格別と江戸に三年の骨折も、それほど甲斐なうて敗亡の落武者、あゝ破れても枯れても生れ故郷が懐かしう、志州の鳥羽に少々賣掛の殘金あるを幸ひ、この末の運を祈禱の伊勢參宮から、上方見物やツて退けての歸國で御坐る、わけて海上たのみます、縁あればこそ世話にあづかる船は一門同然いひつゝ頭を下ぐれば船頭手を振つて膝組直し、「やアお堅いく、商人衆は常の事ながら、船乗の近附には入らぬ慇懃、すつと脛も腕も踏張伸して、他事なう語るが何よりの興、長崎の丸山とは唄に聞くばかりの色所、唐商賣と言はるゝからは定めて小判の鳴つた衆、さんぐ

作つた罪ほろほしに、おもしろい全盛遊談が聞きたいく

「いや御眼力に外れた、見らるゝ通り男は揃ふた二の町、唐商賣ながら蝗の跳脚か蚊の脛に似た我等の瘦身代、女護が島とて何の罪にならうぞ、それよりは港々の横附に待身つらいと泣かるゝ貴方衆、帆綱が切れるほどの美味な」とは言はさぬ、所望く

船中の一時は百年の諺、一籠の飯よりも酒は猶更ら互ひの契情、所は沖津白浪の外に浮世の色もなく、禮儀作法の棧も掟もなければ、思ふがまゝの心うちとけ身を取崩して、飲むほどに唄ふほどに、果は大肌ぬいで入亂れ、おどりの手拍子足拍子、半日の半狂亂に其日も暮れて、春の霞に隠れし遠州高天神の眞黒に見ゆるころ、十八里の海上無事に既崎へ入りぬ、あくれば七十五里

の遠州灘、さすがに人事の渡海と思へば、きのふに變りし船中の働き、便船の五人も表の間に身を縮めて、汐に暮し浪に明し、かねての日取も欠かず三州渥美の沖まで乗切れば、固より手柄顔なる船頭の聲として、

「大すくみ小すくみ、菅島あたりの雲面湧いて、伊良胡と的矢の相汐かゝつたぞ、舵の手を廻せ、帆綱を弛めて七分に下せ」檣の下に立つて喚きつゝ、呟ふを聞けば、

「あゝ追風追浪めでたの今日や、船は一汐、湊は三尺」

ゑんや／＼と聲張上げて志州の鳥羽を見渡し、浪切麻布の横汐を北に向ふて漕割らんとする折しも、何事ぞ水主かんどりが俄かに叫ぶ聲もろとも、船は南に向ふて兒島杵島御座の方へ戻りぬ、

おどろく船頭足踏鳴らし、憤怒の眼を張つて見返れば、便船のうち別て慇懃めいたる色白の一人、種が島の筒口ぬツと差向けて後背に立ちぬ、

「さはぐな船頭、生命が無いぞ」

残る四人の手代と見えしうち、二人は舵の手を奪ふて働く猛勢すさまじく、二人は櫓の小椽を踏で大刀拔放ちつゝ、いざと言はゞ躍り掛つて船中撫斬の面魂夜刃に似たり、

「生きたものは猫の子も便船ならぬ此ごろの物騒に、天下さわぎの海賊、清水の權太が一味とも知らず、いふがまゝの旅商人とは諸も泰平無事の和郎達、生命おしくば日向の沖まで漕出せ」

さけぶ五人の聲々は響き渡れど、大海の浪の上、空ふく風さへ汐に落ちて、

夕日の外は浮世に知らるゝ由もなし。

其六

まつや一聲ほととぎすと唄ふ浮世の軒は固より、浪しづかにして白鷗睡る里の入江も遠ければ、唯ちらほら残る若葉がくれの梢の花を汐うつ島の岩陰に見て、さては卯月の空と知る大海原の夏霞、目も遙かなる日向灘に向ふて、人しらぬ伊豫と土州の果境なる黒崎の沖、釣する蟹の小舟さへ泊らぬ鵜來島の外面に、この一月あまり舵の骨を弛めつゝ、曉の雲にも帆を揚げず夜の浪にも火影を漏さぬ大船は、清水の權太が乗込む海賊船、まさしく天下の尋物ながら猶ほ主もろともに無事なりけり。

百里を見渡す大海には小島の啄む粟粒に似たれども、五尺の人間には大厦高樓に勝る七千五百石の大櫓、櫓を切る風の音は頭上に鳴つて雲や近しと誤まち、底をうつ浪の響きは脚下遠く地軸かと疑ふ、ましてや風なく浪なき時は磐石の大露臺、人影なくば通ふ千鳥も翼おさめて胴の上座に憇ひ、人影ぬつと現はれいづれば忽ち驚いて飛去る風情、宛がら傳へきく浮城に似たり、けふは五月の五日、端午の節句とて世にあるものは、土民の子さへ草の軒端に菖蒲茸添へつゝ、空に翫びく幡さしもの、内に着飾る太刀甲冑、かりの形の品ながら末は眞實に斯くなれと、八十氏川を渡る男兒の式日、ましてや當代武門の長者に生れ玉ひし甲斐には、武具の名物名器を掛連ねて壽き祝ふ殿中の聲々に、甲駿遠三ヶ國の者どもが今日を晴と粧ふて、玉を展べ錦を競ふ

献上の品々、さては城門を埋むる馬の嘶き鎗の林、あらむ限りの冥加を盡して天晴れ名將の器を作ら吉例なるに、さても怖ろしきものは人間の榮枯盛衰、さんざ鳴る磯邊の松風に産聲あけて綺羅錦繡に包まるべき運命を賤しき濱男が手に人となり、萬人に冊かるべき身を板一枚の浪の上に育ち、しかも反逆の落胤と唄はれて花咲く里もなく、古今の大船ながら六十餘州の津々浦々に立寄る蔭もなければ、この吉日を西海の浪に揺られて船底の外に浮世ありとも知ろしめされず、やさしき女といふもの夢にも見玉はねば、鬼に等しき船中の荒男に馴れ名染みて、いつしか下司の業さへ覺え玉ふのみか、わけて此權太を如何なる者とおほしてや、たゞ阿爺々と朝夕に附纏ひ追慕ひ、夜は猪毛の此手枕に正體なく、すやくと眠り玉ふ痛はしさ淺ましさ、せめては今

日の式日吉例を血の涙に唄ひ參らせむと、駿河殿が忘形見の七歳になれるを搔抱きつゝ、山の如き艦の横神に現はれいでし權太が目元には、時ならぬ一時雨さつと浴ひぬ、物おもふ我のみ曇れど心なき空は一天晴渡りて、硫黄灘を北に遮ぎる伊方の土地は雲と水との繼目、大久、名取、梶谷、内浦より佐田の岬に推出して、かすかに高島葛島を抱く七里の滾れ口、西は豊後の關より保戸崎鶴見崎、さては芹崎鞍掛崎を通して薩摩に流す日向灘、東は豫州の横曲由良の岬より土佐の蹉跎に渦巻きおとす浪の色、近くば水島沖島姫島の岩かけ浦かけ、雑魚の壺まで手に取る日本晴の大海に、組立てし櫓の如き人艦の舟張を踏で、横神の下を潜りつゝぬツと立現はれ、海上の悲しさは草の菖蒲も任意ならぬ吉

例、せめて唄にうたふて祝ひまいらせむと、形見の君を搔抱いて四方を見渡す。權太、昔ながら膽、宿しど早や取る年は人間の秋かや、霜降る庭に過ぎつる春ぞ戀しき六十の夢となりぬ、

「菖蒲酒くんで出でませ弓矢の門を、粽餅いはふて召しませ今日の空、しらく白雲しのぐ幟のほり、ゑいやゑいく太刀甲冑、しやんと御馬の鞍手綱、響の音や金地の扇、鎗長刀の打物も、千代の後まで輝やいて、こゝにこの子の末を待つ、めでたき男の末を待つ」

のう和子よ、天晴れ末の御運を待つぞとて、まんくたる大海原に對ひつゝ、汐鏑聲を中音に唄ふ。權太が心、それとも知らでや抱かれながら、絲の如き幼なき聲を張上げて唄ふを聞けは、

「やんさくで帆を巻揚ぐる、三十三段蟬の音で、ゆうべ別れた女房を思や、けふの舟路が雨となる、ゑゝなんとせう、千鳥が啼きおるが吼へおる、あつ腹たつ浪の上」

いつ習ふて聞覚へけむ、おそろしや氏より境遇、節さへ聲さへ片言まじりの舌鼓うつて、肩の上に伸上りつゝ唄ふ哀れさに、權太おもはず老の兩眼しばたゝいて、あゝ曲もなや、いぢらしや、さても勿體なし冥加なし、錦の床にあるべき御身も、この船底を生涯と思ひ玉へばこそ、かゝる淺ましの御聲も聞くなりけり、伽羅蘭麝とて糞土の上に匂はぬ假令、まことに詮もなき世の様と思ひつゝ、はらくと落つる涙を手の甲に押拭ふて、打仰ぎながら五體を震はしぬ、

「これ和孩子よ、その、其うたは、じたい誰に習はしやツたぞ」
 「誰にも習はねど、船中が唄ひおる」

「お道理く、わづか板一枚浪の上の世界で、外に誰が教ふべき」
 いたはしの御身ぞと抱占めて打屈み、あたらし吉例式日を涙に潰しつゝ、胴の坐
 に入りぬ、

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

表に二人、裏に二人、四人の見張男が闇を打來る浪の音に誘はれつゝ、艦と
 軸の聲を合して哀れに唄ひし舟唄も、更渡る海上の露か飛沫か、次第に濕り
 て細く絶々に聞え、今宵の用なきものは勞るゝまゝの身を横たえて、さても

いかなる夢や見るらむ揖枕、うつゝの躰は船外ふく風に争ふて正體もなき船
 底の一間に、船親の權太たゞ獨り眠りもやらず、張詰めたる孤壁の板に背を
 持たせ、胴の上坐の隙間もる汐風にあほられて、ほつと吐く息は五體を絞る
 の風情、さては人しれず物思ふ今宵の苦惱なりけり、
 凡夫の智慧は徒らに罪つくる基因、人間の禍福は糾れる繩に等しと、そもや
 清水港にあるころ且那寺の和尚にきゝし説教を、なんの賣僧奴、たゞ布施の
 料を食ほる方便とのみ思ひしに、眞實なりけり今となりて過ぎつる浮世みか
 えれば、うたかたの水の泡、空ふく風の音、我心いづこより來りて何處の果
 に終るやらむ、地を這ふ草には大鳥の巢を作らぬ慣ひ、されば駿州の濱邊に
 産聲さへも腥き身の、浪に育ち浪を渡りて船漕ぐ業を覚え、日の照加減、星

の出加減、さてはまた津々浦々の汐の満干、夜は千鳥の啼音に夢を結び、晝は水主揖取に氣を結び、雨にも唄ひ風にも唄ふて、陸にあれば磯の眞砂に踵を埋め、海にあれば櫓楫の柄に心を寄せつゝ、櫓の下に大胡坐かいて、人は地獄といへど我のみ易き安樂國の海上を、やんさくで渡れば濟むべき清水の權太、噫あやまてりく、うまれ得たる骨節たゞいて天下相撲を生涯の晴に板東一の男を賣りしが抑も過誤の發端、なまなか家に傳ふる業を惜んで、時の國司に破格の寵遇うけしが第二の過誤、いはるゝまゝに身の程おもはず嬉しきまゝに我からみ、人しれず久能寺に二年の細工は第三の過誤、第四は殺さでもよき可憐ら忠義の若身を打殺して、いざや本願成就と作りあけたる此大船は第五の過誤、これがため却て大恩の貴人を損ひ我また天下を欺む

いて、時ならぬ風雨を神の冥助と儷みいだせしさへあるに、勿體なや己が取る年齢と世上の批判も打忘れつゝ、形見の君を抱いて人がましき孤忠の振舞に今の有様、心のみ焦れど十年なんの功もなく、身のみ碎けど更らに一つの甲斐もなく、あたり金玉の種を浪うちよする西海の船底に植へて、むなしく水と雲との大空に花咲く春を冀ひ、この權太この上になほ幾何の生命を食らむとや、潮の百里を見抜きし目も臙ろに霞み、岩を大地に踏入れし脚もいつしか震ふて、霜おく鬚の毛に風寒く、筋骨たかき手足の老體に昔を夢の今日やらむ明日やらむ、冷かに斃れて起たすば此船を何とせむ、此君を何とせむ、船のみか君のみか我を親とたのみ兄と呼び、あさましき海賊の名に生涯を惜まず、もろともに清水港を出でし三十五人のうち、はや九人まで死亡せて哀

れ南無阿彌陀佛、一片の讀經も叶はず一縷の線香も得立てず、たゞ海に投入れし最後の水音は、七十八灘の浪の音に馴れたる此耳にも、忘れぬぞく、おもへば罪ふかき權太の身や、さんく、苦勞の果に兄の仇と呼はりし其人にさへ、おしからぬ一命おしみて打たせもやらす、形見の君を目前に突付けて逆様に使ひ、萬に一つの幸福もがなと陸に上ほせしより早や三月、四月をかぎりの此浦に待ちつゝ、今に音沙汰なきは必條遣損ねたらむと、佛神現じて怒り玉ふも恐れぬ權太ながら、さすが己が心に責められて腸を絞り、果は堪へずやありけむ眠るが如く打仆れしが、元來したたかの荒男、又むくくくと起直りて脱残りし前齒に唇を噛み、くほみし兩眼くわツと見開いて、我を嘲ける如く物凄き冷笑を浮べぬ、

「ゑッ忘れたか、日本ばかりに日が照らぬは」
 たうくと終夜ら打つ浪の音も馴れては耳に入らず、ゆらくと揺る船の響きも住めば身に覺へず、夜更けて騒がしきほど淋しきは他人の躰、物おもふ身に哀れを添ゆるは燈火の閑けさ、よろず打沈める船底に權太たゞ獨り老の涙を含みて、過越方また行末の惱勞を身一つに搔集めながら、おもはず勞れて其まゝ睡らむとする折しも、艦の舟張に足踏鳴らして叫ぶ聲きこえぬ、
 「やあッ見ゆるぞく、しかも此船を目當の一文字、檣の蟬に約束の赤布が見ゆるぞく」
 權太ふツと聲きゝつけて岸破と跳起き、坐にありし夜具を取て引被ぎしまゝ檣の下に立出で、見渡せば、いつしか明放れたる一面の海上に浪眞白く、朝

風潮に展いて空に残る明星一點、今や消えなむとする土州の柏島幸島の間より、蹉跎の横風に帆を孕ませて漕來る一船は、六百か七百か、千石に指二本ばかりを隔てたる商船、かねて相圖の赤布が燈火の如く散りぬ、權太おもはず笑を含んで二歩三歩あゆみいで、

「待てば甘露の雨よりも、ずつと甘い匂ひが、朝風にふんくやア壇らぬは、傳馬をかけて浪に滾すな、久しぶりの手加減に狼狽へて被らすな、くれやく三國一の大明神」

其七

昨夜の憂に引代て今朝の喜悅に勇みたつ權太、人傳馬を繰下して物馴れたる

男五人を乗込ませ、艦の欄干に片足踏掛けて落むばかりに身を伸しながら、曉の浪に老の汐聲ひゞかして喚きぬ、

「約束の赤布に油断して不覺すな、乗移つて慥かの證據みるまでは敵も同然、第一に船頭、第二に揖取、まづ傳馬に呼卸した上で味方のものに挨拶せい、積荷は米の外に目をかけるな、忘れて金銀の有無を問ふな、萬事かねての相圖に寸分違はずば、口も手も柔かう膝下から出よ、此方の物と極つた上は必ず急くな荒びるな」

さすがの老功、海の上には鬼の權太、卯の毛の隙間なき指圖に働けくと見送りて、残る男に菰を跳ねさせ上板を退けさせ、本帆は掛けねど用意の矢帆を張出し、心地よけに舟笮の上座を彼方此方へ往來の姿は、やゝ肉おちて骨

あらはに、駿州清水の三保の松原もろとも唄はれし昔に似ざれども、面魂は老て一しほの凄味を添へつゝ背は一段ぬツと聳へて高し、

こなたの大傳馬ゑいゝと聲かけて漕行く前汐より、摺違ふて彼方の小傳馬また一文字に漕來るを、權太は横神に身を持たせて待受けながら、近づくまに見下せば三人の乗込、一人は鈴木幸作いのりし吉凶しらねども姿まづ無事なりけり、一人は駿州へ忍ばせて萬事を含めし水主の一人、今一人は年のころ四十五六、あくまで肥太りて見馴れぬ男なれど、髪の色顔の色さては身の振方に同じ渡海の業と思へば、正しく覘ふ積荷を奪るまでの人質なりけり、みおろす權太、見上ぐる三人、互ひに物をもいはず目と目の會釋すれば、傳馬乗捨てゝ上りくる手を、いちゝ取て迎ふは珍客を待つ海上の禮、檣の下

に荒席しかせて四人等しく車坐となりぬ、

「やれ幸作様、けふは我等生涯に一度の吉日、待つ甲斐あつて此喜悅は、權太とんと夢の心地がしまするぢや、あゝ定めて此中は、いかい御苦勞」

「いや我よりは其方こそ、むづかしい重荷の汗水さつし入る、まづ彼の御方に別條なきか」

「御無事の段か、一日ましの御達者に、此ごろは船中の奴等を相手の鬼遊戯」

「おゝ何よりの重疊」

二人の挨拶すめば水主の男すゝみいで、權太に向ひ、

「船頭まづ御元氣に逢ひまする、萬々かねての事は木に餅のなつた我等の上首尾だけに、これ此座に居らるゝが迷惑の本尊ぢや氣の毒の御大將、よしなに

挨拶つけて下され、思ふたよりは案外に物の分つた衆、ほんの男ぢや、江浦から鳥羽への廻船を三州渥美の沖で罪つくり、それから敵味方うちとけて來ました、まるで一家同族、まだ其上の親切には、一寸は九寸九分まで尺のうち、妻子ある生命は少々御免なれど、死なぬかぎりの身に叶うた用あらば働いて進ぜうといはるゝ、我等のための神ぢや佛ぢや、腹いッぱい皮の裂けるほど禮いふて下され」

いひつゝ打會はすれば、權太うなづいて膝組直し、慇懃に頭を下けつゝ演ぶる言葉も海は海づれ、

「やア堅い、御手あけられい、定めて御聞及びもあろう清水の權太、はじめて御意得まする、わけて此度は、天からも降らぬ押しての御無心、ゆるして

下されや、この逆りの次第、ひらに御謝、わびまするノ」

名を聞くさへ怖ろしの權太、天下たづねものゝ海賊となりし今は、人を擱んで骨を吸ふかと思ひの外、老の大男が形容にも似ぬ優しの振舞、さては丁寧の挨拶に八百石の上乗をする船頭風情なんとして頭を上ぐべき、その道は其道の先達に服する慣ひ、縮みあがつて顔の色さへ青くなりぬ、

「北豆州の江浦に住む磯奴、沖親の前では、ほんの事よ、名も孫太郎と申す奴性骨で御坐ります、雑魚網一張の瘦身代たゞきあけて、せう半なしの渡海はすれど、この年さけて十里の汐先も見えぬ盲目船頭、お耻かしう思ひまするぢや、また此度は何の災難どころか、自持でない小船に三度くゞつた下請の積荷、貴方ほどの沖親が扶助となつたは船冥利船頭冥利、それと知つたら

ば荷主を舐めて、船足の沈むほど積込んだもの、わづか五百に足らぬ端俵で、御骨折の甲斐にも當らぬが心外」

いひつゝ四邊きよろしく見廻して己が膝をうち、

「やア〜、さつても聞いたるよりは見て驚く大船の組立、海の城ぢや、海の岩ぢや、この船を港の外にかけて、汐路の外れた浪を自由に割る貴方の爪の垢、御座るまいが、もしあらば貰ふて海上の守本尊、船玉様より効能があらう、鯨の生目玉を抜くより天晴の手柄になりまする」

おそろしさと物の驚きに膽や脱けゝむ、いづるまゝの口を極めて譽立つる言葉の輕きに、さすがの權太も思はず笑ふて顔うちながめ、

「本場の港々を忍んで魚さへ住まぬ横灘にかゝり、天下の御法度やぶつて海

賊するほどの老爺、人様の害にこそなれ、なんの冥利に叶ふべき、されど萬一や、いはるゝ言葉に虚偽なくば、我が故郷、清水港に立寄つて餘所ながらの傳言たのみ入る、六十の坂を上れど見らるゝ通り身に一寸の疲勞もなう、なほ生伸びて浪の上の權太、仔細あつて再び陸に足踏ならぬ罪を持ってど、世に唄ふほどの悪業は働かず、今年の今月今日、いまこゝで其方に逢ふた今日を日本國の見終とし、いづくともなく南の空に向ふて去つたと傳へて下され、我等でも故郷は懐かしい、幼少から知つた人々の事は聞きたい人情、あゝ背門の南瓜の蔓の色まで夢に見まする、其方よく此しやツ面を覺へて見たまゝの傳言たのみます、さんく、馴れ名染んで世話になり世話した人への志、うまれ故郷への暇乞、せめて形見の品を届けたいにも、浪と風との外に草の葉

後の海賊

もない海上の不自由さ、さつして下され」いひつゝ頭を垂れて涙くむ權太の哀れに、鈴木幸作はじめ聞居る男、さては眼前に積荷奪らるゝ孫太郎まで聲をあけて泣きぬ、

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

磯邊の小蟹さへ名を聞いては穴に遁入る怖ろしの海賊が、かくまで深く巧んで引付けし地獄の釜、あゝ百年目、積荷は固より船も奪られて生命は煮らるるものと思ひの外、慇懃の挨拶、丁寧の待遇、會へば聞きしに勝る哀れの男、両手をついて優しの謝罪までせられ、四百俵の米は半金に買はれ、其他は萬事無事の八百石、わかれの汐には十年馴染の港を出る心地、めでたゝの舟

後の海賊

唄に首尾を送られ、さらばくの呼聲に一里の餘波、なんとしてあれが海賊なるべき、半金の損は日本一の沖親に近付の酒料、天下の威勢でも捕られぬ大船の内櫓、さては小隈小板の端まで見たは生涯の一徳、老ての後の語り草、清水港へ傳言の委細まで聞いて歸る我は天晴れ名譽、駿遠の濱邊に此肩巾が廣いぞと、息吹返す一倍の勇氣に鶴來島を放れし船の上は、孫太郎が手柄談話に浪の音さへ餘所に聞えぬ、

されどこゝに一つの不思議は、あの權太が手よりの伊船たのまれし二人の衆、いづこの陸にも停港次第に上げてくれとは、また積荷の商船引寄する二度の業かと、船頭の孫太郎肩うちひそめて問へば、二人の男すゝみいでゝいふ、我等は元來房州の北條が藩士、六年以前、江戸へ渡海の折しも、觀音崎の外面

にて生捕られ、けふまで彼の船中に養はれたるもの、仔細は知らねど陸に放つて術に使ふべき筈が、その幸便なくて打過ぎ、果は無用と諦められたる餘命、としごろ毒蛇虎穴にありとは見ゆれど、その實は客分同然の厚い待遇、馴れ親しんで聞けば聞くほど見上げし權太、あゝ何とやらむ別離が惜うて一滴の涙をこぼし、せめて二人の大小を置土産に、今生の暇乞まで、残る方なく盡せしとぞ語りぬ、

其八

江浦から鳥羽への廻船を奪ふて、紀州の熊野浦より弓形に土佐の沖を乗切り、この西の果まで引付けて四百俵半金の災難に逢ひながら、さても氣心の善い

和郎や、聞及びし鬼の我等が手に案外の情は、拾物も同然の生命冥加、其しるしの禮に置きまする、荒浪のたつ朝、汐風さびしい夕、時に取つては酒にまさる身保養とて、呉れし駿州名物阿部茶の一櫃、それ火をおこせ、土瓶を掛けてこい、湯加減どうじや、ゑゝ埒もない白痴奴、あはて、破團扇の詮議せずとも、日向灘から日本一の風が吹く、あゝ久しぶりの茶の味、また格別ぢや、腹中の毒が消ゆる、筋骨が伸びると舌鼓うつて櫓に集ふ水主揖取、故郷こひしの夢も知らで唯わやくと騒ぐ船底には、一室の戸を建て、船親の權太と鈴木幸作、膝附合して最後の物語に耽りぬ、
先だつものは涙なりけり、幸作は坐を進みて言葉をつぎ、
「萬事は今いふ通りの首尾、老たる一人の父を見殺しにするまで、心を碎き身

を砕いても叶はぬ上は、もはや陸地に所望をかけて何の詮なし、いざ最後の約束、南轅へ押渡つて思ふ存分の働さも、すべて海上たのむは其腕ばかり」
 權太は組みし双腕といて今更に幸作の顔うちまもり、兩眼しばたゝいて聲を曇らしぬ、

「あゝ天晴れ出来しやツたとは過言ながら、さても御人躰みあけまする、兄御の仇を眼前に捨て、君の御ためを思ひ、また親御を見殺して期くまでの御心、たとひ此權太なくとも、それを守らで何を守るが佛神の役ぞ、萬事やぶれた上は日本海を去ること、固よりの覺悟、望むところの最後、遣へきく奥州の伊達、豊後の大友、皆それづくに人を遣つて異國を探り、我生國では駿州の山田某、伊勢では松本の角屋、うたに唄ふ泉州堺の呂宋助左衛門、暹羅安南

には關が原の殘黨おし渡つて一萬人の日本町もありと聞くからは、先祖代々の櫓柄を握つて六十餘年の浪に育ちし清水の權太が、思ふまゝ組立て古今無双の大船に乗りながら、息の通ふ果、目の届くかぎり、漕いで行かれぬ國はない筈、その段は御安心なされませ、しかし、此まゝ慌てゝ帆を巻揚げ、宿さへ知れぬ風に振らるゝも智慧のない業、暇乞のしるし、昔のゆかり遁さぬ筑前の大黒田へ饒別の無心ふツかけて、海上二年の用意」
 「なるほど尤、さすがは沖親の量見、して黒山への方は」
 「この老爺では人目の關が覺束ないのみか、片時も離れては船の無用心、御心勞ながら幸作様、年齒から男振から辯舌動作まで御身柄にかぎります」
 「乗出せば船菰一枚の置所さへ知らぬ我、今のうちの骨折は固より」

後の海賊

「さらば一まづ瀬戸内に入れて、筑前領の浪を蹴ります、貴方は傳馬で人しれず博多へ上り」

「承知、ずんと承知」

* * * * *

玄海灘は此船に他人でもなき浪の色、いつ何として呼べば答ふる瀬戸を忍びいでけむ、筑前の北、於呂の風南、五里を照す烏帽子島の焼火を汐に外して、名さへ勿體ない釋迦牟尼島の浦蔭に、きこえし海賊船さんぶと錨を卸して憚りもなく停りぬ、

ころは六月の下旬、照渡る空は乾蒸の堪難けれど、金殿玉樓にさへ得られぬ

後の海賊

極樂の風、さツくと吹いて櫓を鳴らせば、海上の涼しき骨に染て心地よく、夜は一しほ月なき闇のけしき、うちくる浪の音を鼓の責に聞きながら、胴の間より現はれいでし權太、艦と舳を振返りて吼るが如く叫びぬ、
「三日前に歸る筈の大傳馬が、けふも一日まちくらはしたは却て願望成就のしるし、報知は必ず朝のうちと、約束の手前まづ今夜も曉までは安心して、皆それぐ思ふまゝの夢でも結べ、若い身空は大切の骨節、いざといはど働いて貰ふ代りに、せめて無事の時は老爺の役目、船の上は己が一人で目を張通す、さア櫓におりたく」

戦場にては子よりも大事の雑兵、海の上では妻にもまさる水主楫取、いちく言葉に花を咲かして慰めながら、闇の空うちあほいで星の照影を見透し、

「やア待つたく、今夜は丑満ごろから巽の細雨が来る、表の小道具に菰を被せて本帆を濡すな、楫の手の汐先ひらいて芋綱を練れ、これだけの用が軒の御土産、こよひ一夜の働きおさめ」

いひつゝ大聲あけてからくくと笑ひぬ、

あゝ過分の家を賜はり過分の祿を賜はりて、妻子眷族やすらかに世をすごす三代恩義の主にさへ、わづかの事に方外の怨恨を抱き非道の確執を構へて、旅ゆく人の袖すれ違ふよりも果敢なく、立鳥の水を濁して飛去るのみか、その主をさへ世上に罵り敵に賣り、おのが一身の利慾に飽くもの多き世の中を何事の因縁ぞや、顔は知れども心は知らぬ此權太一人に大切の生命を呉れ、船乗も港々に漕寄せて里の娯樂あればこそ、その娯樂は夢にも見られぬ海上

の春秋、たゞ骨身を碎いて更に憂しともいはず、朝には取楫おも楫、夕には真帆出帆、寝ても船親、おきても船親、いつを限りに何處を果とも知らぬ境涯に、かはいや船親くと叫びつゝ今日と過ぎ明日と待ち、なほも此行末の人間界はおろかの業、悪魔外道の住む里までも諸共に行かむとて、日夜の懸命に働く姿までもいぢらしや、揃ひも揃ひし此中の一人、今このまゝに追放つとも千石二千石には慥かの船頭、沖にあれ磯にあれ浦にも灘にも、楫柄とらせて誰に劣らぬ天晴れの男ながら、我について此船に乗ればこそ菰の運び板の磨き、水洗ひ炊飯の業に腕を殺して、やうく汐風に吹かれし和郎と同じ扱ひ、思へば勿體なし許してくれよ皆の衆、今生にては斯くの不運に生命を取れど、來世は我身を裂いて門守る犬ともならむ、噫たわいなき軒の聲が

聞ゆると、權太たゞ獨り影なき闇の上坐より、櫓の船底さしのぞいて伏拜みぬ、

其九

さすがは名所の浪に臍の緒を洗ふて七十八灘の汐を破りし清水の權太、曉の明星よりも光輝かゞやく兩眼に空を仰いで、巽の細雨が來るぞ風の手を防げと、霄に叫びし言葉は寸分違はず、たゞさへ暗き闇の夜の丑満ごろより墨磨流す横雲に星を包んで、ちかき島々の岩根を洗ひつゝ押戻す汐の勢ひ物凄く、南は唐泊、北は立海、西は肥前の苜浦が浦、東は瀬戸を割切る鐘が崎、それとは知れど目には一寸も見へぬ烏羽玉の海上に、いづこよりか初風さつと吹

落して櫓を切る音、寄るか還るか高浪どつと打つ汐の響き、雨さへ降注いで、さしもの大船ゆらめきつゝ内海の木葉小舟に似たる櫓の上坐を、この道には鬼の權太、都大路を歩むが如く双腕くんで身を連ばせ、のツさくゝと往來の見張に油断なけれど、さすが心さびしう思けむ、我を忘れて唄ふ舟謠は、南無三、とる年の齡なりけり老の聲かれて一入あはれを含みぬ、

「國を出るとき舳に立つて、通ふ千鳥に書ことづきよと、いふた言葉も浪の上、千鳥かよはぬ今日この浦で、苦勞するとは誰が知る、あゝ苦勞するとは誰が知る」

まことに今の苦勞を誰が知るぞ、せめて妻子のないが身の幸福、あらば此うた唄はれまじと、獨言つゝ表の方より歩みより、胴の上坐を越て櫓の根本を

振切ふりきながら、艦かたの舟張ふなはりに乗掛のりかつて欄干らんかんに片手かたてをかけ、見へねど見ゆるは六十餘年よねんの沖育おきそだちじろりと眼まなこを据すへて浪なみの段だてを數かずふる折せりしも、まんくたる此大このたい海かいに何者なにものの仕業しわざかや、闇やみを縫ぬひ雨あめを切きつて飛來とびくる一發いつぱつの鐵砲てっぽう、右舷みぎの方位かたに響ひびきしと思おもふまもなく、面つらさしいだす頬先ほうさき三寸さんばかりの空くうを削けつつて一道いちどうの火くわ光くわうさつと打過うちすぎぬ、

磐石はんじやくの權太ごんたも心一こころひとつの業わざ、五體ごたいは忽たちまち風かぜに散ちる木葉このはの如ごとく、首くびを縮ちぢめ身みを外はらして舟張ふなはりに伏ふしながら、なほ残のこる不敵ふてきの本性ほんしやうそのまゝに這はふて欄干らんかんの隙間すきまより、右舷みぎの闇やみを見透みすかせば、雨誘あめさそふ浪湧なみわいて立返たちかへる眞黒まっくろの中なかより、ぱつと照さす火蓋ひぶたの光輝ひかりもろとも、またもや一發いつぱつ、どんと響ひびいて右みぎの脚あしふみのばす防波なみよけの湍左たみさを買かきぬ、

さては十町じゅうちやうのうちに敵てきごさんなれ、しかも一艘いっそうならぬ忍しのびの捕手とりてごさんなれ、あはれ鈴木幸作すずきかうさくやりそこねて生捕いけさられしか、たしかに黒田くろたならでは知らぬ筈はずの今宵こよひ、おもへば城主あらしの君きみも世よを去さりしか世よを譲ゆづりしか、いづれ主従しゆうじゆうともに事ことあたらしき奴原やつはら、むかしの駿府すんぷを忘れて今いまの手柄てがらにせむとか、所詮しよせん川がなはすば死物しものぶら狂くるひの働はたらきに、遁にぐると見みせて在あるかぎりの敵舟かたねふねを一汐ひとしほに搔集かきあつめ、七千五百石ななせんごひゃくせきの大船たいせんどつと乗掛のりからば何なんとなる、わづかに唐商賣たうせうばいの拔掛ぬけがけを追馴おひなれたる瘦舟やせふね瘦腕やせうで、一時いちじに轉覆くつがへしてこの立海灘けんかいなだに時ときならぬ鬼火おにびの篝火かきりを焼たかむも易やすけれど、かくまで謀はかりし大願だいがんを今宵こよひ一夜ひとよに失うしなふて、たれ哀あはれとも見ぬ海賊かいぞくの終すまりを、陸者おかものごうぜん同然どうぜんの捕手とりてと共に底そこの藻屑もくづと消きゆる淺あさましさよ、たゞし生命いのちは死しすまで我物わがもの、なほ息いきあるうちは清水しみづの權太ごんたぞと、石火せきくわの九死きゅうしに落おちなが

ら腸おしすえて聲も出さず、其まゝ這ふて檣の下に立寄り、世に唄はれし阪東一の金剛力、おしや三十餘年の間うちしづめて使はざりしが、今こゝに大肌おしぬいで本帆の草綱を螺綫臺にからみつけ、一期の力足踏んで彈柄に雙手をかけ、満身の太息ふくんで押廻れば、六人の荒男が膏汗の檣に蟬の音くるくると鳴いて四十八段さつと夜風に揚り、さしもの大船かぶつて浪を蹴る物音に、船底の水主揖取は枕を外して夢おどろき、俄かに叫ぶ聲は手に取る如く聞えぬ、

「やあッ揺るぞく、風か浪か、こちの船親は何とした、剛上つて見よやッ」海賊仕掛に組立てたる古今の大船、かつは女海の荒浪うちよする闇の夜に、飛道具あればとて生命おしみの役目役柄、さればこそ何とやらむ影を潜めて

僅かに二個の鐵砲、この分ならば急に及ばじ、本帆さへ無事にあぐれば自由の海上と、叫びもやらす内檣に降來つて枕ならぶる前後を見渡しながら、わざと沈める面魂は魚油の火影に照されて赤鬼の如し、

「さア皆、起きたく、今の轉動は雨でもない風でもない本帆の餘響、ゑゝ何が不思議ぞ、この權太老ひほれても力量と膽に白髪は生へぬ、やあッ炊飯は何處に居る、あるかぎりの冷飯掴みいだして皆の腹肥せ、足らずば後の用意にかゝれよ、敵が見えたぞ、捕手が來たぞ、七千五百石を小鳥のやうに働かすは主達の腕次第、矢帆を張つて舵の手の三人その影に身を隠せ、ほりあけを撈つて表の二人は菰を被れ、その他は總て二番の防波に這蹲ばり、おれが指圖もろとも加勢の働き脱るな、わすれても狼狽ゆるな、生命は兼て無い

後の海賊

物、今更に見苦しう騒ぐな、目的は對馬か壹岐の方角、片呂島沖を割つて一文字に漕出せく、死んでも海の底には地獄をきかぬぞ、あるは龍宮乙姫どの眷族ばかり、この世で女房持たぬ代りぢや、死晴と婚入を一處の稼ぎ、悪うはあるまい、あゝ面白いぞや」いひつゝ己が寢起の一室に走入りぬ、物の分別こそ劣れ膽はいづれも權太に劣らぬ二十餘人、きくや否や枕を蹴つて跳起き、互ひに氣勢をかけつゝ最後の用意とゝのえば、胴の廣室にすらりと立並んで、これが此世の暇乞、船の上では誰彼なしの一生懸命、冥途の旅に顔見忘れるも残念や、とツくと見せよ、よツく見てくれ、あゝ久しい間の兄弟分、いかい世話になりました、いや世話甲斐もない浮世、おなじ故郷に生れて同じ板一枚の上で死ぬれば本望、さア打揃ふて今期の手打手拍子、し

やんくくと物凄き音もろとも、おのく走出てで見渡せば、まツくら闇と思ひの外、一里ばかりを取圍む敵船の篝火は萬燈の如く、海上一面の沖を照して時ならぬ白晝となりけり、

折しもつゞいて躍りいづる權太を見れば、あはれ六十三年を夢と過ぎ、これを今生なごりの姿とや、草蒲革の襟首とりし沖襦袢に、老の手足ぬツと現はして腕には鍵繩鍵苧、背には古き帆布に包みし形見の君を十文字に負ひ、黒頭巾、白腹巻、四尺柄の大斧ひツさけて踏出す踵は船草鞋、檣の下に仁王立となつて見渡す眼中に血を注ぎぬ、

「やあッ取揖、取揖、取揖ふりきれやッ」

後の海賊

其十

當代の隨一、武門の長者、うまれ得たる資性の英氣ほとばしりては、ただならぬ目色に寛永の空を睨む恢ろしの君と唄はれ、天下の諸侯これに服して江戸參勤の途すがら、駿府の城門に馬を繋ぎ駕を止むれば、忽ち讒者の舌にかかりて三代將軍の心を惱ませ、果ては上州高崎の大信寺に怨恨を吞で生害ありし駿河殿に、いやしき濱男の身をもて破格の寵遇うけしのみか、人しれず頼まれまいらせし清水の權太が、祖先傳來の業を揮ふて三年の生血に組立てしほどの海賊船、固より通ふ小船を引掛けて朝夕の利慾を貪ほるべき筈なれば、何事か當世に深き怨念を残すのしるし、七千五百石の大櫓を日本六十餘

州の津々浦々に乗廻して、十年の春秋を斯くまで嚴しの詮議に逢はざるは、さてこそ駿府に昔ゆかりの大名これを扶けて、その忘形見さへ船中に養ふ果は何をかする、いづれ年代記に乗るべき大事、あゝ天晴れ不敵の男ぞと目には見ざれど耳に傳へて、さしもに名高かりし古今無双の大船も、あはれや筑前領の釋迦牟尼島に停りしが運命の窮極、黒田が闇を犯し百艘の捕手に巻かれ、四面より一時に火箭を射掛けられては、さすがの船も男も無残や浪の上に焼失せて、もゆる災焔は曉までも半空を焦し、なびく黒煙は筑前の濱邊に吹寄せつゝ、十里の村々が咽返りしとの風聞、ぱつと世上に傳へて、いづこの里も半歳の物語たゞ此事とのみなりぬ、

* * * * *

黒田の勢が焼討の手柄に玄海灘の闇を破りしその曉方、一艘の小舟に乘込みて唐泊の沖を過ぎつゝ、筑前今津在の一村に上りしは何物と思ひの外、清水の權太と鈴木幸作、さては無事なりけりと驚かず、それと見るより磯邊に迎へいづる三人の武士、慇懃に勞はりながら前後を守りて、村外れの漁民が家に入りぬ、

家内には兼て用意の一室、宿のものを追退けしむ影さへ見へねば、夢の心地の權太も胸おちつけ、まづ背負ひし形見の君を坐におろしつゝ、弓矢八幡いづこも怪我はなかりしか、痛所おはさぬかと見る目に老の涙ほろくくと滾しぬ、迎へいでし三人の武士いづくともなく去りしあとには唯二人、幸作まづ膝を

すゝめて、四邊を見廻しながら聲低く打語りぬ、

「昨夜の有様、さぞや訝かしう思はれむが、これには深き仔細」
 いふ顔じつと打守りて流石の權太も大息つきぬ、

「ふかき仔細の段が、佛神も泣くほどの切ない仔細がなうて濟むべきや、何がさて阿修羅が脛を揃へて働くとも、蝗の如く四面より射掛くる火箭に、手の届かぬ悲しさは南無三船火事、もはや絶體絶命と覺悟の折から、敵の中より浪を割つて漕來る一艘に貴方の姿、やれ飛乗れ、飛乗れ權太、たゞ飛乗れくと叫ばるゝのみか、背には形見の君が驚き泣く聲、あゝ辛かつたぞや幸作様、一期の苦しみ察して下されや、もろともに故郷をいで、果敢ない十年の今日まで、朝夕に船親くと附従ひし者共が、叶はじと思ひきつて袋口よ

り豆の滾るゝ如く、うづまく火焰を踏んで海に飛入る最後の哀れを見ながら、おめく生きてこゝまで運ばれし權太が心に、すんと得心まいるほどの深い仔細を聞かすば、貴方を退けて誰を怨まう、この權太は生死の境に立つ瀬がないぞや」

「勿論のこと、今となつて怨めるゝ上は、つくせし我の不存この腹こゝで割つても見せむ仔細は、萬事打合はせし通りの方便を以て、首尾よく黒田家に立入り、かねての委細を頼みこめば、まづ休息せよとて引退る廊下口に二人の捕手、この幸作は不意に生捕られ、一室に押込められて無念の涙に明せし其翌朝、重役の老體より我を招いて申すには、なるほど當家は駿河殿に一方ならぬ御入魂なりしか、それはありし昔のこと、星霜たちて何事も變りし

今は、たゞ御命日を懇ろに弔いまいらする外、別に際立ちて竭すべき筋もなきのみか、近年江戸よりの指圖に、もしかの海賊船を見當ながら打漏すは反逆同然と、きびしき沙汰の今日このごろ、現在まのあたりの筑前領に浮びおること、第一は當代への不忠、第二は世に聞えて武威うすき當家の恥辱、かたゞ私の情義は天下の法度に代難く、幸ひ今宵の闇に乗じて焼討に致せば、萬事叶はぬ成行と諦めよ、さりながら、其方は一味の最後みたからむ、せめては一片の回向念佛したくもあらむ、その心根ふびんに存じて、一艘の早舟と二人の梶取を貸す上は、勝手次第に乗出して思ふまゝに振舞へ、また朋輩の死骸を拾ふて葬むる土地なくば、我等より墓所の案内さすべきもの三人、この者も顔よく覺へおきて、あとかたの萬事を相談せよと、その場で引合さ

れしは先刻濱邊まで迎ひにいでし武士」

いひつゝ膝をすゝめて權太に對ひ、兩の拳を握る幸作の面色、さつと色變へて何事をか思ひきりぬ「其方の分別いかに、黒田の術に乗りしか、たゞし黒田の情に生残りし我等か、もし術に乗りしならば踏込で仇を報はむ もし情に逢ひし生命ならば一禮のべて此土を立去り、また改めて後の工夫」

死せるが如く默然として聞居る權太、やうく頭を擡けて組みし双腕を解き、いつしか勞るゝまゝに睡入りし形見の君を見返りながら、

「あゝ悪かつた、何事も皆この權太が過誤、鵜來島から日向灘に添ふて、あのまゝ南方へ漕ぐべき運命を、おろかの大膽に深入して今の破滅、おもへば黒田家に微塵の怨恨もなし、たゞ恨めしいは我身の不覺、わづかの用意に目

が暮れて、十年海上の若勞を船もろとも煙とし、二十餘人の一味を水火の貴苦に見殺し、あたら忠孝の貴方を、さんく憂に追ふた果は不孝不悌の奴としながら、六十三の老爺こゝに生伸びて、なほ人間らしい面の皮さつても恥かしや、この恥かしさ愚かさは、所詮足らねど生命一個で謝罪もせう、たゞ死んで八大地獄の底におちるとも、謝罪ることならぬは、そもや大納言様への申譯なんとすべき、虫にも劣る根性を抱へて、うけし破格の恩を報いまいらせむなどゝ及ばぬ願望おこし、忘形見の御身を搔取たてまつりて、けふまでの業を見返れば、勿體なや權太が弄びしも同然」

言葉もろとも己が拳に膝の肉むしつて、鬼の兩眼とちつゝ男泣に泣きぬ、

後の世に徳を布く名賢さへ、いきて時に合はずば其道に破れて心ならぬ草葉
 に泣く慣ひ、ましてや駿河殿が恩顧の武士およそ四萬人、甲駿遠三ヶ國に肩
 を並べ肱を張りて一時の全盛に誇りしが、御生害の後には宛がら火の消えしが
 如く、あはれ誰一人の昔を忍ぶ忠臣なき中より、三代相傳にもあらぬ一人の
 父を墓前に見殺し、親しう御目かけられざりし其子としてあたら若身を年ご
 ろの艱難は、まことに士たるの本分を盡せし鈴木幸作、また清水の權太は浪う
 ちよする濱邊の下司より這出で、御生前には却て憚りもなく人おどろかせ
 ど、なき御跡に血の涙しほつて一命さへけ、日本一の海賊と唄はれながら心
 は潔白の孤忠に形見の君を抱き、十年の海上おもふがまゝに出没して天下の

の威勢にも捕られざりしは、天晴れ古今めづらしの男、二人もろとも其君に
 附添ふて當家に來よかし、かつては駿河殿と淺からぬ御ゆかりに、汝等の生
 涯を扶持せんは固よりせめて御あとを客分として三千石まゐらせむと、なさ
 けの使者しきりに來つて促せども、幸作は權太に分別をゆづり、權太は幸作
 に智恵を譲りて、その年も空しく今津の在家に過しぬ、

たのみし船は焼かれ、誓ひし一味のものは死し、我また老て餘命うすき今日、
 なんとして再び心のまゝに動かるべき、よし死際の生命をかけて動くとも、
 黒田領を出づれば忽ち海賊の權太、陸の上に召捕られて見苦しき憂目の飛沫

を掛けまいらせんこと、罪の上の罪なり、不忠の上の不忠なるのみか、なまなか今は用なき我あるがため、前途遠く心も深き鈴木幸作に三の足ふませ、いたづらに月日を過させては所詮の御爲おそかるべし、噫かねては假令いかなる不運に渡らせ玉ふとも、この老爺が影身に添ひたてまつりて御先途見届けむと、朝にいのり夕に祈りし甲斐もなく、今は我から身を退かで叶はぬ淺ましの權太、御なごりは飽まで惜しけれど、これも浮世かや、たゞ陰ながら此一身を犠牲に供へて、偏に末の御武運長久を念じまいらせむと、おもふ心の苦節を拙き筆にいはせ、一封の遺書を殘して、涙もろとも夜にまぎれ、いづこともなく立去りぬ、

*

*

*

*

*

とる年は老たれど天生の膽いよく、太く、育ちし浪を離れても本來の心なほ慥かに冴へて、いたづらに辯舌利巧の男千人よりも、はるかに優りて行末この君の力ともなるべき身を、なんとして俄かに匿しけむ、いまはしの世上に飽きしか、まゝならぬ人間に怒りしか、たゞしは仙人を怨みしか、おのれを恥ぢしか、たとひ跡白雲の山に分入つて草の根を食むとも、八重の汐路の果に浮んで流にまかすとも、あれほどの執心いかで此君を得忘るべき、されば花さく春の朝、月てる秋の夕、風にも雨にも人しれぬ涙にや暮さむ、名も知らぬ里の軒にや明さむ、あはれの權太が成果よと、あとに残されし鈴木幸作狂氣の如く悲しめば、おしき名物を失ふたりとて黒田家よりも人を四方に走

*

*

*

*

*

せ、あまねく探し求むれども、ふくは松の風、よするは浪の音、山にも海にも
 影なく影なし、

後の海賊終

回外餘筆

其上

ころは承應年中、筑前の黒田が藩中に其身一代の客分となりて、三千石の捨
 扶持に無役無席の武士あり、姓は浅井、名は國松、とる年齢は二十歳の上を
 二つ三つ、うまれ得たる天生の美貌に衣服の華奢を添へて、伽羅たきこむる
 小袖の匂ひ、楳花のかほり床しき髻の太毛、身の捌き言葉の端までおのづか
 ら一際の流を立て、なんとやらむ藩中の長老にも座席をおかれつゝ、月に三
 たび城主へ禮儀の外は、朝夕たゞおもふがまゝに振舞ふて、さらに憚らざ

る風情いづれ尋常ならぬ身の、そもや當家にいかなる仔細の間柄ぞと問へば、知るもの聲を潜めつゝ答へていふ、あれこそは去ぬる寛永の空に落花狼藉を唄はれし駿河大納言の忘形見、世を忍んで十年の浪の上を海賊船に育ちしが、成果の生命を保ち竭きし武運の末を當家に拾はれて、今は生涯を露の情に寄する其姓の淺井とは、遠き外戚に當れる祖父、江州小谷の城主淺井備前守長政のゆかりにて、國松の名は父君大納言が幼名を取りしとぞ語りぬ、されば世にいふ日蔭の身ながらも名木の餘香、常將軍家には正しき甥君として、城主の扱ひも懇ろに重ければ、固より藩中の諸士も敬ひつゝ、女子を持つ親心の便により人橋かけて續れども、なほ今に妻を迎へず、若き殿原の末をたのみ縁を求めて交らむとすれど、なほ今に一人の友も結ばず、近づくものは栗

毛の駒一乗、家には四十前後の後見これや鈴木幸作、その他は仲間五人のうちを草履取にめし厨に働かせて、かくまで由緒ある三千石の一家たゞ六人の男世帯に、春は花の下、秋は月の影、心のまゝに安き世を渡りて一代の所望なきに似たれど、我から避けて此地に久戀の根を植ゑざるは、さてこそ父の子なりけり、いつまでか大名の寄人に終るべき、やがて時機を得ば忽ち乗出さむとするの顔色たしかに含みぬ、

承應二年の春も過ぎて夏なほ早き卯月の初日、淺井國松が今の身の例によりて、愛馬に跨りつゝ登城の途上は轡口の奴一人草履摺一人、世が世なりせば

郎従あまた附隨ふて立つべき槍長刀の巖を空しく餘所に見つ、西國の大名に
 我から參候の心おもへば哀れなれど、際立つ馬上の美男さらに衣服大小の數
 寄を柳めて、本田の白轡、みがきの鏡鞍、金地の扇面に照日をかざしつゝ紫
 手綱をしほる風情は、天晴れ畫ける武家の上乘、往來ふ男女の足を停めて羨
 望の種となりぬ、

もとより容分としての待遇なれば、式例おはりて後の一室所に、城主と差向ひ
 つゝ四方山の物語に時刻うつり、果は茶席に伴ふて人なき閑談のおりから、
 淺井國松その膝を進めて涙を含みぬ、

「今日ついでながら、國松あらためて懇願の仔細、もとより御意に反かず御
 當家に恙なき上は、あはれ御聽入れ下されうや」

「何事か知らねど、思ひこまれし儘、腹藏なう語られい、萬端お身のため決
 して悪しうは謀り申さぬ」

「ありがたき仰せについて、御たのみの一條は、そもく國松すでに今年二
 十三歳、元來非運の一命を玄海の浪に沈むべきところ、御當家の御なさに
 扶けられ、さて後は一段の御扶持に、不肖の身も斯く人となり、朝夕のうれ
 しさ、年來の御恩しみく骨身に染みながらも、なほ此上の御ふびん仰ぎた
 いは凡夫、さても凡夫の淺ましさ、たとひ父なるものは世に憚かる生害を遂
 げしにもせよ、二位の大納言、ありし昔の全盛は駿府の城、かつは江戸の屋
 敷跡、また上州高崎の大信寺に残る一基の墓碑、たゞ人傳に聞いて曉の寢覺
 に思ふばかりの境涯は、その子として、なんと堪ゆべき國松が心中、もし哀

れと思しめさば、今年の江戸御参勤には、何卒この身を御同勢の中へ御加へ下されうか、餘所ながら江戸の繁昌も見たく、また一生おもひでもなき日陰者ながら、せめて諸家の名物風儀も覺へたく、第一は父の墓參、かたぐ歸りの道中には江州へ立寄り、今この國松が名乗る淺井の姓の舊跡もたづねたく、また備後の尾の道は生みし母が哀れの底に終焉の場所ときく「いひつゝ兩眼の涙はらくと膝に落せば、さすがの城主も目をしばたゝいて聲くもらしつゝ、

「いづれも尤の次第、申さるゝ其所より聞く身の辛さ、あゝ何事も浮世とおほせよ、父君さへ無事にましまさば、我等こそ却て參候の禮を取り、諸事を願ひまいらする御身なるに、あさましいは人間の變遷、御幼少のころは浪の

上の船底に育ち、やうく御運ひらいた段が何事ぞや、心にもなき西海の家門に可憐ら生涯を寄せ、二十三の今となりて田夫野人に等しう花の江戸を見たいが所望とは、噫さて悲しのことを承はる、餘事は偕おき御參參は孝道の本文、此方にも前々より心掛くる次第にて、おりく家老どもへも相談等閑ならねど、知らるゝ通り當時江戸の歴々衆は皆これ曾ては父君の御仇、將軍家に讒して悪しく待遇まいらせしが故の御生害と、世上の風聞に乗る人々が目鼻の中へ、其所の身として二十三歳の無事の姿は、なんとやらむ御ため善かるまじと」「それほどまでの御心添は、身に取りて勿論のこと、うせし父も嘸満足に思ひおらむと存ずれど、もし問はるれば黒田の家臣淺井國松いづくまでも斯の通りと名乗り、御同勢に紛れて少しの差別さへなくば」

「いや御譜代の大名ならば格別、外様國司には寢床の端までも知ろしめす當代の御威勢、なかく、むづかしいのみか、まづ將軍家は正しう其所の伯父君、その他の御一門いづれも飛鳥おとす御繁昌を、まのあたり見られなば何と思すべき、口惜しき御墓參の涙いまだ乾かぬ目には一段の怨恨あつて、果は我を忘るゝ歎憤に御心を苦めむよりは、結句ありし昔を此西海に忍びてしづかに安く時機を待たむこそ」なぐさめ諭す城主の言葉は何とか聞きけむ、さては駿河大納言の血筋を引きし心の曲りにや、淺井國松むらくと顔色を變えて、

「いちく、仰せの赴は、あまり御情すぎで、國松殆んど迷惑のいたり、此身が江戸へ御供いたせば、いたづらに千代田の城を羨み、一門の榮華さては諸

家の繁昌を妬むで、ありし父が無念を思ひおこし、竟には御當家に御支障を掛けむとの御懸念にや、たゞし國松が三千石の御恩を不足として、幸ひのおりから江戸へ罷りいで、父が縁を求め知邊にすがりて、風雲の富を望む見苦しのものと御見下け遊ばしてや、いづれにもせよ、梵天かけて御當家の御恩を無にせざる間、是非に御連れ下されたし、もし反逆同様のものゝ子と現はれて、恥辱みむほどならば國松なんとして生命を偷むべき、みごとに切腹いたして申譯の一札には、素性を包み名を偽りて今日まで黒田家に衣食せしものと、たしかの遺書を」

「いやこれは何ときかれしぞ、むかし駿府の知遇を忘れぬ一片の武家氣質より、憚りながら御あとの其所を扶持する我等、たとひ今こゝに露現して將軍

家ちきくの嚴命ありとも、如水以來の黒田が意地、其まゝ手を束ねて御身を渡すべきや、まして江戸に出府したりとて、其所が切腹の後の申譯の一札を嬉ばうや、此たび連れ申さねば左様の儀にてなし、全く御身のため思へばこそ、さるを我等が心に背き、おしても江戸へ出らるゝならば獨身にて立たれよ、萬事の用意には三千石を五年に積り、一萬五千石は黄金に代えて言下に辨じ申すの上、あらためて今生の御別れ申そうまで」さすがは西國一と世に唄はるゝ黒田家の主人、義を解き理を説て諭せども、あゝ飽までも駿府殿の子や、一念かうと思へば恩義の枷を碎いても我意を振り、生命ものはと進みいづる膝を動かし、天生の美顔さらに凄味を帯びて狂せるが如し「國松わがまゝに出府いたすほどならば、かくまでの懇願も仕らず、また行末にか

かる五年の御扶持を、眼前の金子に戴いて道中の綺羅を飾りたくもなし、ただ腰の兩刀、編笠一つ、めしつかふ家來一人、干飯を食んで草鞋を踏む分のこと、これまでの御恩は父子もろとも冥途より御當家の御守護とならむのみ、さても御供の義は叶ひまじきや」

「叶はぬでなく、ひらに止め申すばかり、それ得心まいらずば致方なけれど、九死の中より主従もろとも生きて残れる鈴木某とやらむに、よく御相談あつて後の御挨拶を聞かう」

「されば今日このまゝ御暇を申しあぐる、かさねて明日中に御返事いたさずば、淺井國松もはや御領地を發足せしと御あきらめ下されたし、唯々これまでの一方ならぬ御恩、なんとも御禮のいたしやうもなき有難さ」わけて慰

勤ぎんの頭かうべを下さげ、しづかに坐まを立たつて退まりゆく姿すがたより心こころまで、あゝ肖にたりや似にたり、さても似にたりけり駿河殿すまがきのの面影おもかげそのまゝぞと、みおくる城主あらしの目元めもとに得えならぬ懐舊くわいきゆうの色いろを含ふみぬ、

其中

松まつのみどりは冬ふゆに立たち、貞女ていぢよの良人おととし死しして後のちのこと、されば眞實まことの忠臣ちゆうしんその忠ちゆうの現あらはるゝを願ねがはず、まことの義者ぎしやその義ぎを包つんで世よに隠かくるゝ慣なひ、こゝに同じおなじ比類たひひの鈴木幸作すずきかうさくは、あはれ一人ひとりの兄あにを犬死いぬじさせつ、老おひたる父ちちを見殺みころしつ、あたら若身わかみの生涯しやうがいを指さす敵てきもろとも浪なみの上うへに浮うべ、さんく憂目うれめの果はて

借かからぬ生命いのちを拾ひろふて、埋うれ木ぎの花はな咲さく里さともなき形見かたみの君きみに事つかえ、何なにおもひでの西國住居さいこくぢゆうに早はやや四十路よそぢの坂さかを上のぼれども、今いまに慰なぐさめむ妻つまもなく後のちを便たよらむ子こもなければ、主しゆうと共に獨身どくしんの影かげさびしき生涯しやうがいを、朝夕あさゆふたゞ我身わがみの分ぶんとして餘所よそふく風かぜに鬢びんの毛けも動うごかさず、はかなき世上せじやうの成果なりはてに心こころを寄よする風情かぜいたれと語かたらむ、

* * * * *

けふは城主じやうしゆうへ禮儀れいぎの例日れいじつ、いのる佛神守ぶつじんまもらせ玉たまへ、さても變かはらで無事むじなれかしと、日蔭ひかげの主持しゆうぢつ身みには一ひとしほ家いえを思おもふて待まちつ程ほどもなく、門前もんぜんに嘶いなく馬うまの聲こゑ、走出しゆしゆで、玄關けんくわんに迎むかふれば、うまれついたる片頬かたほの笑あはれさへ見みせぬ淺井國松あさひくにまつ、

たゞならぬ顔色を浮ばぬ目元に寄せつゝ、

「幸作か」たゞ一言の外に大儀との言葉もなく、其まゝ足を早めて疊ざはりも荒々しう、おのが寐起の一室に入りぬ、

やれ氣遣はしや、風姿こそ女にせまほしき優しの生得ながら、心は元來父君をうけし一徹知慮、物に觸れては前後の會釋なく、さらに事の憚りもなければ今日の城中おほつかなしと、鈴木幸作おもはず眉を擧めて影を追ひ、入りし一室の此方より慇懃に手をついて、

「まづ今日も無事の御對面相濟み、御めでたう存じまする」

「いや幸作、けふは、とんと目出たうなかつたは」

聲もろとも膝を進むる幸作、主の顔つれぐと打守りて、

「御歸館の御様子といひ、また唯今の御言葉、じたい如何がの」

「外でもない、この國松もはや今年二十三歳、世を忍んで非運の底に暮せど、満足に育ちて武士一人の身となりし甲斐には、せめて江戸に罷りいで、御墓参かゝつた、ありし父君が全盛の舊跡、かつは諸家諸門の有様も見たしと、今年の参勤に同伴をたのみしところ儲きかぬ城主の頑固、ならぬとよ、叶はぬとよ」いひつゝ、無念の涙ふくむ面色いぢらしけれど、心の一物、それと察しては幸作も飽まで引止めむ覺悟の色を現はしぬ、

「子として父の墓参は孝道の一端、また唯きゝおよぶ江戸を見らばかりが、どれほどの支障となるべき、さるを明智といはるゝ此城主が、おして押し止むるには定めて深き仔細、

「おゝさ、いふに及ばず聞くに及ばぬこと、江戸見物と父の基參は出府の飾口上、その實、時運よくば世に乘出さむ我本心を危ぶむが故ぢや、されど幸作よく聞け、浮世なればとて二位大納言が子と生れし我、いつまでか西海の汐ふく風に打たれて、わづか三千石の寄人風情に終るべき、今こゝに引止むるとも所詮は飛出すべき我なるに、三才兒を叱るが如き口もて、淺井國松が行末までも埋木とする城主の心體あまり無得心と思ふは、もし強て出府するならば勝手にせよ、五年の扶持米を金子に代て生別死別の贖にせむとは、いよくこの我を用なきものと見下けたる言分、但し三千石の恩を上見ぬ笠に着するの振舞か、いづれにしても堪忍ならぬ武士道の意氣地、これまでの恩は恩なれ、この後の出世を他人の指圖に阻まるべきや、もし二十三歳を一期

に遺損ねて死するとも、駿河大納言が子として聊かの怨恨なし、父子もろとも俗世に全からぬ名は、三千石の滾れ米を貰ふて露の生命繫がむよりは遙かの本望ぢや、兩刀の外は馬も武具も手道具も賣拂ふて、三百里の道中たゞ草鞋にかけたならば、飢もすまい凍えもすまい、江戸に着かば誰あらう將軍は伯父なり、尾州水戸紀伊の面々として、忠長の忘形見そのまゝの門前拂となるべきや、また主人なき門に盡すべき義なけれど現在その子ありと知らば父が恩願の者ども、畜類ならぬかぎりは二人三人馳來つて力となる徒輩もあらむ、かつは聞及ぶ大信寺の墓にかけたる金網、今なほ其まゝならば、みごと生きたる高崎の城主に網きせて見む、かれやこれや思へば片時も堪らぬ國松、もはや脱兎の本性こゝに現はずぞよ、汝も多年の忠節なほ末までも我を捨てず

ば、いざ諸共に此地を去らむ、また斯くいふ我に不承ならば、此まゝ止まつて世を安く送れ、事ならば現世に恩を報はむ、事ならず冥途より謝びむ、いかに幸作」鈴木幸作はらくと泣いて膝を進ませつゝ、

「いちくの仰せ、御道理すぎて御いたはしきまでに存すれども、性の急なるは事を破り、事の早きは性を破るとやらむ、すでに御年二十歳を過ぎせども人間いまだ半生に届かぬ今日、前後左右も思はず、たゞ御心の一念に任せて箭を射るが如きは」

「いや、聞かぬぞく、きけば汝も泣き我も泣くばかり、たとひ涙に座を浮かせて腸を断つとも、許してくれよ、國松うまれて思ふ覺悟は返さぬぞ、恩を知らぬものと怨まば怨め、義に薄き奴と憎まば憎め、元來おしからぬ生命、

けふまで他人の扶持に生存て日夜の胸を忍びしは、全く、神もつて汝が忠義の厚きに絆され、すぎし權太が残る苦勞に免じてぢや、嗚呼もはや何事も言ふてくれるな、狂氣じみたる主を持ちし不運と諦らめよ、幸作々々、淺井國松たゞいま改めて、この通りく」

さすがの不敵者も忠義の露には骨身を押しされけむ、しみぐ幸作を見上げて兩の手をつき、心もろとも鐵石より固き頭を疊に擦付けぬ、

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

現在の主に頭を下けられし幸作、豪放頑骨あればどの主に兩手をつかれし幸作、たとひ鬼神を説く理解ありとも、なんととして其上に言葉を出さるべき、た

だ兩眼を袖に掩ふて脚下も震ひつゝ、作るゝ如く己が一室に身を抛込みしが、おもへば四十四年の可惜ら忠義も、野末の小屋の端女が夢に劣りしとや悟りけむ、あはれその曉に一片の遺書もなき腹十文字の骸を横たえぬ、さすがの淺井國松も、幸作が死骸に三日三夜の回向稱名、五臟六腑を絞る涙の雨を降らしながら、怖ろしやなほ出府の志を翻さぬ血色、鬼にもあらで盡ける如き花の姿の美男なりけり、

其下

いのち拾はれし恩義の黒田家が引止むる袖を振切り、さらば道中の諸用と差

出せし金子にさへ目も呉れず、當世にあるまじき孤忠の幸作に哀れの腹きらせ、その骸に血の涙は注ぎながら残せし心の露も汲まず、たゞおのが燃ゆる功名の一念に東の空を望んで、つまおりの葦笠を頭に戴き、履馴れぬ草鞋に足を占め、腰には兩刀、手には一面の扇、三千石客分の家門ふらりと出で、立去りぬ、

淺井國松が心強くも立去りしその夕暮、いづこよりか一人の大入道さまよひ來りて、主人なき門前を懐かしげに往來する體、年齢のころは八十の上や越ぬらむ、ふるびたる麻の衣を纏ふて名も得知れぬ老木の杖を曳き、胸に垂るる髭鬚は白糸を搔亂せるが如く、老の兩眼ぎろくと輝いて、幾年の雨露霜雪にうたれし面色さながら人間とも見へず、肉おちて筋骨たかき手足は枯木

に似たれども、心や確なりけむ腸や肥たりけむ、繩鼻緒の木履ふむ力足、大地に響かせて門の内を差覗く折しも、主に振捨てられて厨の雑具貰ひしが今生せめてもの仲間三人、鍋釜を荷ふて立出づるを見るより、かの大入道しづかに呼止めぬ、

「やれ男衆、ちと物たづぬる、こゝの主人殿は御無事か、鈴木幸作といふ用人なほ息災か、みれば道具を持運ぶ體、さては轉宅にても御座るや」
三人の仲間ふりかへつて聲せはしう、

「ゑゝ家の轉宅どころか膽魂の轉宅ぢや、その鈴木様は腹切つて御主人は先刻火急の旅立、我等は取残されの鍋釜同様、これから他人手に渡る港口」いひつゝ、走行く後影みおくりて、この大入道なんとかしけむ、持てる杖もて地

上を打叩きつゝ、暮れかゝる卯月の空を仰いで、

「あゝ無益々々」

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

あれほどの一念に功名の鬼と狂ふて立出でし淺井國松、翼あらば宙をや飛で翔けむ、病めば這ふて山川を渡らむとまで思ひの外、さてその後いかに果てけむ、江戸にも絶て名を聞ず、駿河に立寄りし跡もとどめず、上州高崎の大信寺にさへ詣でし影もなく、一年浪華の津に松平某といふ浪人、すぎし駿府のゆかりと稱へて市中を荒らし、果は捕られて詮議に逢ひしが、これも其人ならず眞實の曲物と風聞せし折しも、こゝに一人東國の藩士が語るを聞けば

近ごろ我主の得たる一刀は、そもく大納言忠長卿が生前の秘藏なりしを、かつて筑前の黒田家に賜はり、黒田家また其後さるべき仔細ありて、返さで叶はぬ人に還せし名劍とぞ、されば淺井國松この大名の手に死せしか、この大名は時の將軍家に出頭第一の歴々といへば、世に隠され人に知られぬ最後おもひやられて哀れなり、

*

*

*

*

*

*

*

*

*

*

こゝにまた黒田の藩士が後々までも惜みしは、若氣の短慮に千日の萱を焼きし一夜の身ならず、さては其人に返せし名刀おもはぬ里に落ちしがためならず、たゞ淺井國松あやまつて此地を去りし夕暮、いづこよいか飄然として訪

回外餘筆完

來し大入道こそ、正しく清水の權太が成果と引止めて、西行法師に弓矢の古實を習ひし鎌倉殿の古智、せめて世に珍らしき大船渡海の秘術を聞かざりしが心外なりとぞ言傳へぬ、

大正九年四月十日印刷
大正九年四月廿五日發行



著者

村上

定價金壹圓五拾錢

海賊

發行者

飯島竹次郎

東京市日本橋區數寄屋町參番地

印刷者

高橋郁

東京市京橋區弓町廿五番地

發兌元

東京市日本橋區數寄屋町三番
振替東京四五五四番

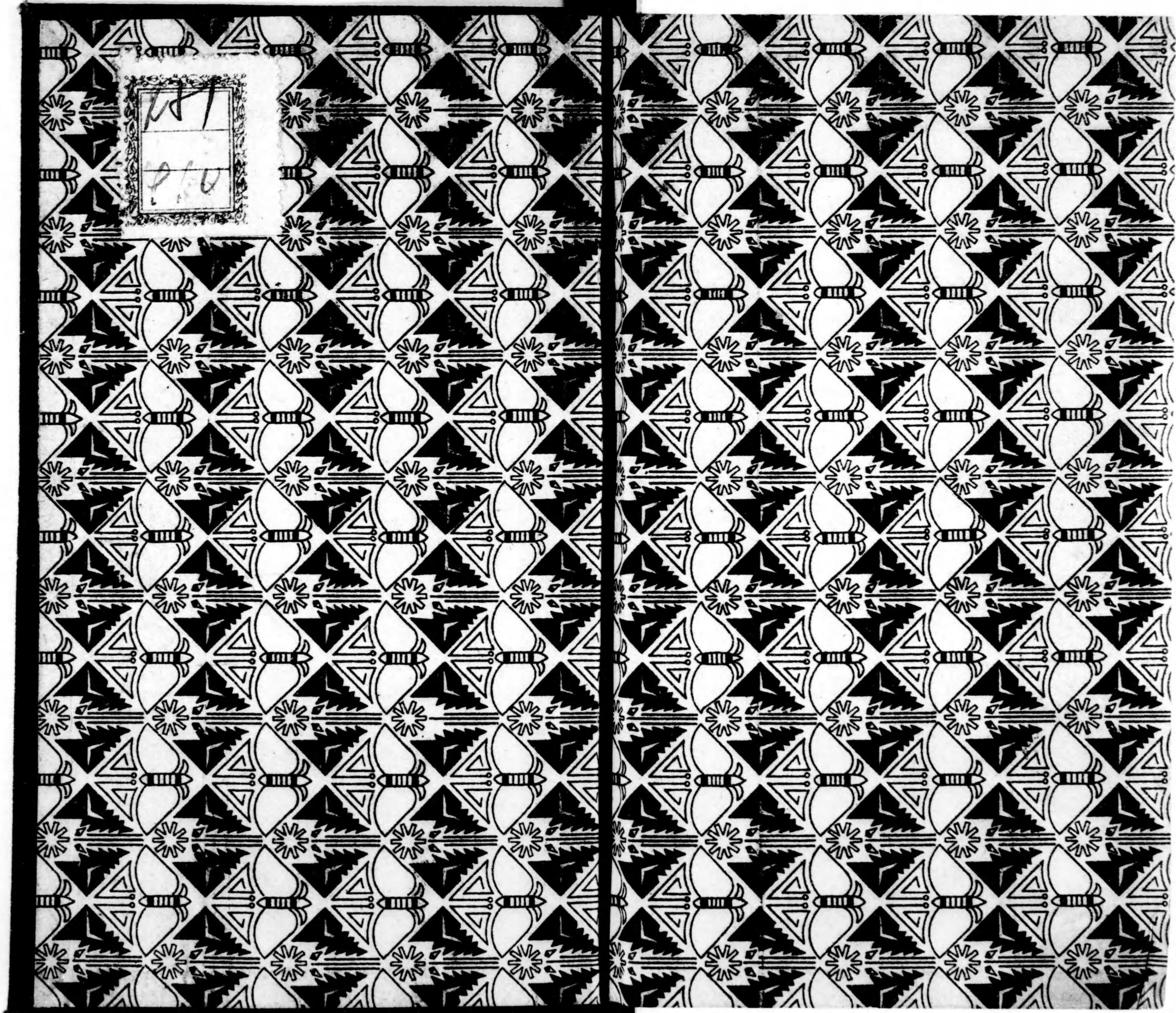
明文館

(社會式株刷印協三 所刷印)

著名生先六浪上村

人 の 垢	縮刷三五判金美本					人 生 の 旅 行	
	馬鹿野郎、稻田一作	日蓮と豊太閣	いたづらもの	稲田一作	馬鹿野郎		豊太閣
定價金壹圓卅錢	合 金貳圓	本 金貳圓半錢	定價金貳圓	定價金貳圓	定價金壹圓卅錢	定價金壹圓卅錢	定價金壹圓卅錢
送料 貳錢	送料 貳錢	送料 貳錢	送料 貳錢	送料 貳錢	送料 貳錢	送料 貳錢	送料 貳錢

如飛行賣々噴評好



終